

看護学生の死生観に関する研究

The Study of Nursing Students' Attitudes toward Life and Death

石田 順子, 石田 和子*, 神田 清子**

*群馬大学医学部附属病院看護部, **群馬大学大学院医学系研究科

要 約

この研究の目的は、看護学生の死生観に影響する要因を明らかにし、終末期教育に対する示唆を得ることである。対象者はA看護専門学校に通う看護学生113名であり、それらの対象に質問紙調査を行った。測定用具は平井らが開発した死生観尺度 (α 係数=0.88) 7因子27項目の臨老式尺度を用いた。回答が得られた学生94名をSPSS11.0j for Windowsを用いて分析を行った。この研究は、A専門学校の校長の許可を得て、学生に成績に影響しないことを保証して行った。その結果は、次のようにまとめられた。

1. 死生観には、宗教、性格型、読書、映画、年齢、学年が影響していた。
2. 学生は、「死後の世界観」の得点が高く、「死からの回避」の得点が低かった。
3. 死生観に「身近な人の死」が影響していなかった。
4. 終末期教育において、講義や技術の教授のほかに死に関する書籍や映画を取り入れて生と死を討論できる教育を行っていく必要性が示唆された。

キーワード：看護学生、死生観、看護教育

はじめに

看護学生は、臨地実習のなかで終末期にある患者を受け持つと、戸惑いを感じていることが多くあり、患者から逃避したり、患者にどのような看護ケアが提供できるのか悩んだり、コミュニケーションすらできないことが多くある。しかし、臨床場において、病院で死を迎える人が多数いる現在、死は日常茶飯事のできごとであり、避けて通ることはできない。患者の死に対する対応は、看護師の経験年数に多少の差はあるが、新人看護師でさえそれなりに対応できている。看護学生は、看護学校に入学するまでは死についてあまり考えることなく過ごし、看護教育を受けていく中で死について考えはじめ、講義や演習で死に直面しながら死生観を形成していくと考えられる。この死生観が終末期実習において、学生の実習態度や患者とのかかわりに大きく影響していることが考えられる。

看護学生の死生観に関する研究では、菊池¹⁾と新見²⁾が、看護学生が死をどのように意識付けているのか

PIL (Purpose-in-Life Test) を使用し明らかにしている。また、古屋³⁾は、看護学生らの死生観の特徴を自己の「生」を肯定的にとらえ、「死」を生命の終焉と感じ、魂や精神性の永存を意味すると捉えていることを明らかにしている。また、読書が死のイメージに影響を与えることを明らかにした研究^{4) 5)}や終末期看護教育の評価に関する研究^{6) 7)}が行われている。川守田⁸⁾は看護学生の価値観が死生観に影響していることを明らかにしている。また名越⁹⁾はターミナル期の患者を受け持つての学びのレポートを質的に分析し、感情の中心を自己から他者へ向ける教育の必要性を明らかにしている。このように看護学生が死をどのように捉え、イメージしているのかについての研究や終末期教育に関する研究は行われているが、看護学生の死生観に何が影響しているのか影響要因に関する研究はほとんどされていない。

そこで、この研究の目的は、看護学生の死生観の特徴をふまえ、何が死生観に影響しているのかを明らかにし、今後の終末期教育に対する示唆を得ることとした。

用語の操作的定義

1. 死生観

死生観とは、生きる意味と生の延長線上にある死についてどのように捉えているかという個人の考えをいう¹⁰⁾。ここでいう死生観とは、生と死に対する考え方であり、生き方や死に方についての考え方や価値とする。

方法

1. 対象者

研究対象者は、A看護専門学校に在学中の1年生、2年生、3年生で研究に同意の得られた者である。

2. 調査方法

自己記述法による質問紙調査

3. 調査内容

質問紙の主な内容は、①対象の特性（学年、年齢、性格型等）、②影響要因（奥ら¹²⁾の研究を参考に「身近な人の死の経験、映画を鑑賞し死について考えた経験、読書を通して死を考えた経験」の有無とした）③YG性格検査④死生観 である。

4. 測定用具

1) 死生観の測定：平井ら¹¹⁾が開発し、信頼性と妥当性が証明されている α 係数0.88の臨老式死生観尺度（以下死生観尺度とする）を用いた。本尺度は、7因子（死後の世界はあると思うなどの項目を含んだ「死後の世界観」、非常に死を恐れているなどの項目を含んだ「死への恐怖・不安」、死とはこの世の苦しみから解放されることだと思うなどの項目を含む「解放としての死」、死について考えることを避けているなどを含む「死からの回避」、人生にはっきりとした使命と目的を見いだしているなどを含む「人生における目的意識」、死とは何だろうと良く考えるなどを含む「死への関心」、寿命は決められているなどの「寿命観」）27項目から構成されている。回答は「当てはまる」「かなり当てはまる」から「ほとんど当てはまらない」「当てはまらない」の7段階選択肢で7～1点に配点される。この尺度における死生観は複数の因子全体を指すカテゴリーの名称であり、すべての総合点を求めるものではない。「死後の世界観」「死への恐怖・不安」「開放としての死」「死からの回避」「人生における目的意識」「死への関心」においては、最低が4点、最高が28点である。「寿命観」においては、最低が3点、最高が21点である。

2) YG性格検査：今井¹³⁾の方法に従い、感情や行動を抑制しがちなI型（内向型）と活動的で情緒が安定し

ているII型（外交型）に分類する。I型にもII型にも含まれないパターンをその他とする。

5. 倫理的配慮

A専門学校の校長に調査の目的を説明し、承認を得た。学生に対しては、研究の趣旨を説明し得られたデータはこの研究目的以外には使用しないこと、調査への参加の有無は、成績とは一切関係ないこと等を文書にて説明し、質問紙の返却をもって同意を得られたものとした。

6. 分析方法

回答の得られた看護学生111名のうち有効回答94名に対し統計ソフトSPSS11j for Windowsを用いて分析を行った。基本集計を行った後に、死生観に影響すると考えられる要因と死生観尺度の関係を分析した。2項目間の比較はt検定、3項目以上の検定には一元配置分散分析（F検定）を用いて行った。対象の年齢に関しては、実年齢で単純集計後、10歳代、20歳代、30歳代で集計し、分析を行った。

結果

1. 対象の概要（表1）

対象の概要を表1に示す。

対象者の内訳は、1年生が28名（29.8%）、2年生が36名（38.3%）、3年生が30名（31.9%）である。対象者の年齢は、18歳～39歳であり、平均値21.1歳、標準偏差（以下SDと略す）4.3歳である。年齢は、10歳代39名（41.5%）、20歳代49名（52.1%）、30歳代6名（6.4%）であり、約半数が20歳代である。

性格は、感情や行動を抑制しがちな内向型が55名（58.5%）、活動的で情緒が安定している外交型が19名（20.2%）、どちらにも属さないその他が、20名（21.3%）であり、内向型の性格が半数を占めており、内向型の性格に偏りがみられている。

宗教の有無においては、特別な宗教を持っている学生が8名（8.5%）である。また、身近な人の死を経験している学生は、20名（21.3%）であり、学生の年齢が10歳代と20歳代の学生が9割以上であるため、少ない傾向にある。映画を鑑賞して死を考えたことのある学生が7名（7.4%）であり、読書をしたことをきっかけに死について考えたことのある学生が17名（18.1%）である。

2. 死生観の項目別得点（表2）

死生観の項目別得点を表2に示す。

対象者の死生観の項目別得点は、「死後の世界観」平均点19.6点、SD6.4点、「死への恐怖・不安」平均点

表1. 対象の概要

項目	n=94	
	N	%
学年		
1年	28	29.8
2年	36	38.3
3年	30	31.9
年齢		
10歳代	39	41.5
20歳代	49	52.1
30歳代	6	6.4
性格型 ¹⁾		
I型 (内向型)	55	58.5
II型 (外交型)	19	20.2
その他	20	21.3
宗教の有無		
有	8	8.5
無	86	91.5
身近な人の死		
有	20	21.3
無	74	78.7
映画での経験		
有	7	7.4
無	87	92.6
読書での経験		
有	17	18.1
無	77	81.9

1) 性格型 I型=感情や行動を抑制しがちな内向型
II型=活動的で感情が安定している外交型

表2. 死生観の項目別得点

死生観の項目	最小値	最大値	平均値	SD
死後の世界観	4	28	19.6	6.4
死への恐怖・不安	4	28	17.7	6.9
開放としての死	4	25	12.4	5.5
死からの回避	4	24	9.6	5.1
人生における目的意識	5	28	15.9	4.9
死への関心	4	28	14.9	6.1
寿命観	3	21	10.2	5.7

17.7点, SD6.9点, 「開放としての死」平均点12.4点, SD5.5点, 「死からの回避」平均点9.6点, SD5.1点, 「人生における目的意識」平均点15.9点, SD4.9点, 「死への関心」平均点14.9点, SD6.1点, 「寿命観」平均点10.2点, SD5.7点である。「死後の世界観」が他の項目と比べると特に高くなっており, 死後の世界の存在を信じ魂は残ると考えている学生が多い。

3. 対象の概要と死生観との関係

対象の概要と死生観の関係を表3に示す。

「死後の世界観」において, 映画を鑑賞して死を考

えたことのある学生の平均が6点低く, 統計学的に有意差 ($t=-2.506, p<0.05$) が認められている。映画を鑑賞して死を考えた学生の方が, 死を実感でき現実のものとして捉えることができている。「死の恐怖・不安」においては, どの要因とも有意差はみられていない。「開放としての死」においては, それぞれの要因において統計学的な有意差はないが, 特定の宗教を持っている学生の平均点が3.8点高く, 有意傾向にある。「死からの回避」では, 学年において1年生の得点が他の学年に比べると高く1年生と2, 3年生の間に有意差 ($p=0.028, p<0.05$) が認められている。「人生における目的意識」では, 年齢において統計学的な有意差 ($F=3.734, p<0.05$) が認められており, 30歳代の学生が, 10歳代, 20歳代の学生より, 有意に得点が高い。年齢の高い学生は, しっかりとした目的意識を持って入学していることが伺える。また, 性格型において, I型 (内向型) とII型 (外向型), I型とその他, II型とその他それぞれの性格型の間に有意差 ($F=3.625, p<0.05$) がみられている。圧倒的に, II型 (外交型) の得点が高くなっており, 活動的で情緒が安定している学生がしっかりとした目的意識を持っている。また, 統計学的な有意差はないが, II型の学生の「死への恐怖・不安」の得点が低く, 死に対する不安や恐怖もI型の学生に比べ低い。「死への関心」において, 読書を通して死について考えたことがある学生のほうが, 考えたことが無い学生より, 平均が4.8点低く, 統計学的にも有意差 ($t=-3.026, p<0.01$) が認められている。「寿命観」は, 平均点が10点前後であり, どの要因との関係にも統計学的な有意差は認められていない。

考 察

死生観の得点においては, 他の項目に比べ「死後の世界観」の平均点が19.6点と高くなっていて。「死後の世界観」の下位項目は, 死後の世界はあると思う, 死んでも魂は残ると思う, 人は死後, また生まれ変わる等の項目である。日本において死は, タブー視され, 一般的に日常生活から隔離されている。そのため, 学生は, 死に直面する機会が少ないことが推察できる。死をその人の存在がなくなるのではなく生まれ変わることで捉えている人が多く, 死を現実のものとして受け止められていないと考えられる。認知的側面において学生は死を実感のないことと捉えており, 死は別の世界にあると認識していると考えられ, 死を自分のこととして向き合っていない学生が多い²⁾ ことが

表3. 対象の概要と死生観との関係

項目	死後の世界観			死への恐怖・不安			開放としての死			死からの回避			人生における 目的意識			死への関心			寿命感		
	平均	SD	t,F値	平均	SD	t,F値	平均	SD	t,F値	平均	SD	t,F値	平均	SD	t,F値	平均	SD	t,F値	平均	SD	t,F値
学年			1.178			2.036			0.076			3.707*			0.168			0.686			1.812
1年	21.2	6.5		19.5	7.1		12.7	6.4		11.7	6.2		15.6	4.8		15.9	6.1		11.8	6.7	
2年	18.9	6.6		16.1	6.9		12.2	5.1		8.5	4.3		16.2	5.8		14.1	6.2		9.9	5.7	
3年	19.1	5.8		18.1	6.5		12.3	5.1		8.9	4.3		15.7	3.9		14.9	6.1		9.0	4.4	
年齢			0.461			1.894			0.318			2.168			3.734*			0.190			1.391
10歳代	20.0	6.2		18.2	6.8		12.6	5.5		10.5	5.4		15.1	5.0		14.8	6.0		11.3	6.3	
20歳代	19.6	6.3		18.0	6.9		12.4	5.7		9.1	4.7		15.9	4.6		15.1	6.2		9.4	5.1	
30歳代	17.3	8.6		12.5	6.2		10.7	4.3		6.3	4.4		20.8	4.0		13.8	7.0		9.2	5.3	
性格			0.006			1.510			0.579			0.455			3.625*			0.172			0.480
I型	19.7	5.9		18.3	6.5		12.7	5.2		9.9	4.9		14.8	4.9		14.7	5.2		10.1	5.4	
II型	19.6	7.3		15.3	6.8		12.8	5.6		8.6	4.5		18.2	5.0		15.6	7.4		11.2	5.9	
その他	19.5	7.0		18.6	7.9		11.2	6.3		9.7	6.1		16.6	4.2		14.7	7.4		9.5	6.3	
宗教			-1.570			0.546			-1.844			-1.127			0.243			-1.924			-0.165
有	19.3	6.3		17.1	2.7		15.6	5.8		11.5	4.9		15.5	3.9		18.9	6.1		10.7	6.1	
無	23.0	6.2		17.8	7.2		12.1	5.4		9.4	5.1		15.9	5.0		14.5	6.0		10.1	5.6	
身近な人の死			-0.385			0.917			-0.203			0.628			-1.086			-0.487			0.415
有	19.1	7.0		19.0	6.6		12.2	5.0		10.2	5.1		14.9	4.9		14.3	6.0		10.7	6.1	
無	19.8	6.2		17.4	7.0		12.4	5.6		9.4	5.1		16.2	4.9		15.1	6.2		10.1	5.6	
映画			-2.506*			0.045			-1.338			0.388			-0.746			-1.373			-0.640
有	14.0	7.0		17.9	7.5		9.7	4.3		10.3	6.3		14.6	4.6		11.9	3.2		8.9	5.2	
無	20.1	6.1		17.7	6.9		12.6	5.5		9.5	5.0		16.0	4.9		15.1	6.2		10.3	5.7	
読書			-1.218			1.340			-1.092			0.970			-1.792			-3.026**			-0.191
有	17.9	6.5		19.8	6.2		11.1	4.9		10.6	5.3		14.0	4.9		11.0	5.2		9.9	4.9	
無	20.0	6.3		17.3	7.0		12.7	5.6		9.3	5.0		16.3	4.8		15.8	6.0		10.2	5.9	

p<0.05*, p<0.01**

明らかになっている。また、死を実感できない原因として、身近な人の死を経験している学生が20名と少なく、死を自分自身のこととして受け止める経験ができていないことも影響していることが考えられる。吉田ら¹⁴⁾の研究において、年齢が若い看護師ほど「死後の世界観」の得点が高いということから、学生も同様であり、若い人のほうが死後の世界の存在を信じ、魂の存在を信じる傾向が強いことが明らかになった。映画を鑑賞し死を考えた学生の「死後の世界観」が有意に低かった。それは、映画から死を考えるきっかけを得て、実感のない死を現実のこととして、受け止めることが出来た結果であると考えられる。死を実感できるように映画を取り入れた教育も必要であることが示唆された。

性格型において、感情や行動を抑制しがちなI型(内向型)が活動的で情緒が安定しているII型(外交型)より多い。一般的には、内向型と外交型とその他

の性格型の関係は2:2:1である¹³⁾といわれる。性格型は、人生に目的意識を見出しているという内容を含む「人生の目的意識」に影響していた。明らかに外交型、その他の性格型の学生のほうが得点が高かった。外交型、その他の性格の学生のほうが未来へ向けてポジティブに生きていることが考えられる。内向型の性格の学生が半分を占めており、自分の感情や行動を抑制してしまうことから、終末期の患者と向き合えない原因の1つであると考えられる。その学生達が目的意識をしっかりと持てるような教育が必要であると考えられる。なぜ看護師になろうと考えたのか、しっかりとした看護感もてるような看護教育を考えていかなければならない。学生一人一人が、充実した学生生活を送り、看護師になるという目的を見出せるようなサポートをしていく必要があると考える。また、「人生における目的意識」においては、年齢で有意差がみられた。30歳代の学生のほうが、10歳代20歳代の学生よ

り、有意に得点が高かった。30歳代の学生は、一度社会にでて仕事を持っていた人もおり、社会における荒波の中で挫折や様々な経験をしており、その経験を通して資格をとりたいという強い目的意識をもって入学してきている学生が多いということが考えられる。このことから、人生にしっかりとした目的意識を持つこと、なぜ看護師になろうと思ったのか動機を明らかにすること、そしてそれに向かって進んでいくことが大切である。

宗教に関しては、「開放としての死」と「死への関心」に有意傾向があった。学生がどのような宗教を信仰しているのか、今回は明らかにしていないが、「開放としての死」は、死がこの世の苦しみからの解放を意味しており、聖書によれば、キリスト教における死は、罪からの開放であり、仏教においても死後、極楽浄土へいける¹⁵⁾ということからも明らかであるように、宗教を信仰することで、死から開放されることである。「死への関心」とは、死について良く考えるということであり、宗教を通して死を考える機会が多いため影響があることが考えられる。死についての個人別態度構造には、宗教的な経験も含まれる¹⁶⁾ということから、宗教が死生観に影響していることは当然のことである。「死への関心」においては、読書を通して死を考えている学生の得点が有意に低かった。読書をして死に対するイメージが「悲しい」「暗い」というネガティブなイメージが変化し、「自然な」「大切な」というイメージに変化し⁵⁾、死を受け入れやすくしていることが考えられる。読書を通して生と死を考える機会を持ち、死のイメージを肯定化し、死を自然のものとして受けとめることができるので、「死への関心」が薄くなっていることが伺える。

死について考えることを避けるという内容を含む「死からの回避」の得点が2、3年生に比べ、1年生の得点が有意に高かった。菊池¹⁷⁾らの研究において3年生の死生観が有意に低かったという結果と同様であった。学年が進むにつれ、疾患に対する講義とともに死に対する講義も進んでいくことが推察され、死と向き合う機会が多くなっていることが考えられる。様々な学習体験が深まることで、死を現実的に考えられるようになっておりそこに看護感が付加されてきていることが考えられる。

今回の調査において、「身近な人の死」は死生観に影響していなかった。山崎¹⁸⁾は、人は近親者の死を体験することで、死を強く意識し、その人をめぐる人々の感情について理解すると述べており、近親者の死は

死生観に何らかの影響があって良いと述べている。また、近親者の死の経験は、人間として、その後の死生観を深めていく経験である¹⁸⁾¹⁹⁾といわれている。両親や祖父母、親戚、友人の死といった近親者や身近な人の死が、死を意識するきっかけになり³⁾、実際に死を考え始めるものである。今回、死生観に「身近な人の死の有無」が影響しなかった理由として、「身近な」ということをきちんと定義しなかったことと、「身近な人の死」とのかかわりを定義しなかったためであると考えられる。同居している祖父母の死にかかわるのと、別居している祖父母の死にかかわるのでは死生観に差が出てくるのが予測できるからである。友人の死においてもどの程度の友人なのかによって、死生観に差が出てくるのが考えられる。今後はどのように「身近な人の死」にかかわったのか、またどんな関係の人だったのかを明らかにし、分析する必要がある。自分の身近で死を経験していない学生が、死生観を深めていくための教育方法を検討していく必要があると考える。

これらから、学生の死生観には、性格型、宗教、読書を通して死を考えた経験、映画鑑賞を通して死を考えた経験および人生に目的意識を持つことが影響していることが明らかになった。死生観を深めていくためには、看護師になるという目標をしっかりと持つこと、すなわち看護感をもつことが重要である。また、学生は講義の中で生と死に関する知識を習得する必要がある、そして生と死について考えることができる読書や、映画鑑賞を行う必要がある。学生が、自分自身の死生観を持ち、その大切さが理解できて、死を現実として感じられるよう具体的な事例を提示し、討論していくような教育が必要であることが示唆された。

結 論

本研究では、専門学校の学生に対する死生観について以下のような結論が得られた。

1. 学生は、「死後の世界観」の得点が高く、「死からの回避」の得点が低かった。
2. 「死後の世界観」においては、映画を鑑賞し死を考えた経験の有無に有意差があった。
3. 「人生における目的意識」においては、性格と読書を通して死を考えた経験の有無に有意差があった。
4. 「死からの回避」においては、1年生の得点が他の学年にくらべ有意に高かった。
5. 終末期教育の場において、講義や技術の教授のほか、看護感を確立できる教育や本や映画を取り入れて生と死を討論できる教育を行っていく必要性が示唆

された。

謝 辞

今回、本研究の実施に当たり調査にご協力下さいましたA専門学校と、ご支援ご指導頂きました皆様に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 菊池和子：看護学生の死生観—Purpose in-Life Testの分析より—。岩手県立大学看護学部紀要，2：91-98，2000.
- 2) 新見明子：看護学生の死生観—Purpose in-Life Testの分析より—。川崎医療短期大学紀要，22：25-30，2002.
- 3) 古屋洋子，小野興子ら：看護学生の死生観。山梨県立看護短期大学紀要，9（1）：115-129，2003.
- 4) 落合清子，長井美佐子：看護学生の「死のイメージ」の変化—読書による死生観確立への影響について—。聖隷クリストファー大学看護短期大学部紀要，27：7-13，2004.
- 5) 福山幸恵：看護学生を対象とした読書による「生と死の教育」の基礎的研究「生」と「死」のイメージを中心として。日本看護学教育学会誌，14（3）：9-18，2005.
- 6) 石原由華，滝益栄ら：終末期看護における教育法の検討—終末期患者の体験談聴講後のレポートを通して—。日本赤十字愛知短期大学紀要，15：53-59，2004.
- 7) 本間千代子，中川禮子：終末期看護ケアの授業と看護学生の死の不安認知。日本赤十字武蔵野短期大学紀要，14：37-42，2001.
- 8) 名越恵美，細川つや子ら：受け持ち患者を看取った看護学生の学び。日本看護研究学会誌，27（2）：85-91，2004.
- 9) 川守田千秋，風岡たま代：看護学生の共感性と死に対する態度の関係。神奈川県立衛生短期大学紀要，35：15-20，2002.
- 10) 河野友信，平山正美：臨床死生学辞典，日本評論社（東京），18-19，2000.
- 11) 平井啓，坂口幸弘ら：死生観に関する研究—死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証—。死の臨床，23（1）：71-76，2000.
- 12) 奥祥子，塚本康子ら：看護学生の死についての態度行動。鹿児島大学医学部保健学科紀要，14：13-19，2004.
- 13) 今井一枝：性格と生活習慣の関連性。日本公衆衛生誌，37（8）：577-583，1990.
- 14) 吉田久美子，石田和子ら：大学病院に勤務する意志と看護師の死生観の比較。投稿中.
- 15) <http://www.asahi-net.or.jp/AI6y-UCYM/siseikann.htm>
- 16) 奥祥子，塚本康子ら：看護大学2年生の死についての個人別態度構造。鹿児島大学医学部保健学科紀要，12（2）：43-48，2002.
- 17) 山崎裕二：看護・医療系短大における「死の教育学」の実践（1）—「死に関する看護・医療系学生の意識調査」の授業導入—。日本赤十字武蔵野短期大学紀要，15：89-96，2002.
- 18) 内布敦子：医療施設におけるend-of-lifeケアの実勢状況と医療従事者の死に対する態度。ターミナルケア，3（2）：154-162，2003.
- 19) 橋直美：医療を支える死生観。関西大学社会学部紀要，97：161-179，2004.

The Study of Nursing Students' Attitudes toward Life and Death

Junko Ishida, Kazuko Ishida*, Kiyoko Kanda**

* Division of Nursing, Gunma University Hospital

** Gunma University Graduate School of Medicine

Abstract

The object of this study is to make clear the influential factors of nursing students' attitudes toward life and death and to make a suggestion in terminal care education. Subjects were 113 students of nursing school A, whom questionnaire surveys were conducted on. A scale of views of life and death developed by Hirai et al. (coefficient $\alpha = 0.88$) was used as a measurement scale. SPSS11.0j for Windows analyzed answers from 94 students whom answers were retrieved from. Approval to conduct the study was obtained from the school principal, and students were ensured that the survey would have no effect on their records at school. The results are as below:

1. Whether the student has a religion or not, personality type, whether the student has a habit of reading books or not, whether the student has a habit of watching movies or not, age, and the school year of the student were influential factors
2. The students had high scores in "afterlife belief" and low scores in "death avoidance"
3. "Death of close ones" had no influence on the students' views of life and death
4. It was suggested that the adoption of books and movies and discussion on life and death is necessary in terminal care education, aside from lectures and skill teaching.

Keywords: Nursing students, Views of life and death, Nursing education